

口問題を J.C. Caldwell 博士が分析する。

ついで経済問題にはいり、オーストラリア国立大学の Professional Fellow の J.C. Caldwell 博士が、マラヤの輸出貿易とマラヤの国際収支との2編を提出する。Agricultural Development Council のクアラルンプール駐在 C.R. Wharton Jr. 博士は、とくにマラヤ主産物のゴムの供給条件を分析し、若干の政策を示唆する。オーストラリア国立大学の Senior Fellow の E.K. Fisk 氏は、マラヤにとって重要問題である農村開発問題を取りあげる。オーストラリア準備銀行の D.G. McKenna 氏は、マラヤ中央銀行創設のための援助の経験にもとづき、マラヤ連邦独立後の金融・財政の発展を説明する。シドニー大学の Senior Lecturer の E.L. Wheelwright 氏は、マラヤの工業化の過程をあとづける。そして、最後に Silcock 博士がマラヤ経済政策を要約される。

付録として、Silcock 博士による国民所得の人種間の配分の推測と、Cordon 博士とオーストラリア国立大学の Research Assistant の H.V. Richter 氏とによるマラヤの貿易統計および仲継貿易なる論文がおさめられている。

以上の内容によって明らかなように、マラヤ経済の諸専門家が、マラヤ経済の重要問題をそれぞれの専門からとりあげており、いわば、かなり包括的な論文集である。その論文のそれぞれについては、問題の余地があろう。しかし、全体としてみると、マラヤ経済、あるいはマレーシア経済の数少ない入門書のひとつである。同時に、比較的恵まれた後進国の経済発展についての、まとまった case-study である。少なくとも、マラヤ経済研究のためには、ぜひとも一読されなければならないものである。(本岡武)

André Mousny: *The Economy of Thailand, An Appraisal of a Liberal Exchange Policy*, The Social Science Association Press of Thailand, Bangkok, 1964. 280p.

東南アジア諸国のなかでのタイ経済の特徴は、為替相場の安定、堅実な経済成長にある。この特徴がどうして生まれたか、この基本的な問題を真正面からとりあげ、それが自由な為替管理政策にあると結論づけたのが本書である。

著者ムーニイ博士は、東南アジアにおける為替管理

政策の実際的な専門家である。まずサイゴンおよびプノンペンでのインドシナ為替管理局の管理官を3年つとめ、インドシナの通貨ピアストルの相場についてのすぐれた研究を発表した。ついでビルマにうつり、フランス大使館商務官として4年勤務。1960年はじめ、さらにタイにうつって、今日に至っている。すでにこれら諸国の経済事情についてすぐれた論文を *Far Eastern Economic Review* や *Eastern World* に発表しているが、3年前に SEATO の文化関係プログラムのフェローシップをうけて、まとめあげたのが本書である。

本書は、きわめて、よくまとまった形をとっている。すなわち、第1章では、戦時の1942年から始まって、1963年に至る間の、この国の為替管理政策の形成、発展を要説する。これをうけて、第2章では、1963年末現在における為替管理の概要を基本方針・輸入管理・輸出代金・通貨と送金・金の規則等について、まとめる。第3章はタイの輸出について、為替相場の影響・一定期間内での受取外貨の販売・国別輸出・業者別輸出などを、第4章はタイの輸入について、輸入の増大、国別輸入・商品別輸入・輸入業者などを考察する。ついで第5章をタイの財政政策にあて、通貨政策・予算・国内債および金融部門の概要をつかむ。第6章はタイ通貨の安定性の貢献にきわめて重大な役割をはたしてきている諸外国や国際機関からの財政的援助を評価する。この章は、タイ国経済の理解のための重要なポイントである。ついで、第7章では、タイの通貨バートの価値が、貿易収支、対外収支、1947~62年間の為替レートおよび外貨保有等の視点から分析され、自由な為替管理政策が外国からの投資をまねき、さらに為替相場の安定の要因となっていることを明らかにする。最後の第8章では、タイの経済発展、第9章では国民生活水準の上昇を示し、これが自由主義に負うところの大きなことを明らかにする。

したがって、本書をつうじての論旨は、タイ政府が戦後、賢明な自由な為替管理政策をとってきたことの高い評価にある。それを裏づけるために、豊富なデータが駆使されている。わたくしはその論旨には、だいたい賛成する。ただ、この自由管理政策を実行しえた背後にある政治的安定と、中国系タイ人のタイ化政策の成功とがあげられなくてはならない。この点からい

って、東南アジア諸国では、しばしば政治が経済に優先する。

ともあれ、本書は、なぜタイが東南アジア諸国のなかで堅実な経済成長をつづけているかに答えるための、最もすぐれた研究である。わたくしは、タイ経済についての文献として本書を推奨する。(本岡武)

Komando Operasi Tertinggi : "Madju terus……Pantang mundur!" Diakrta 1964. XI+249.

本書のサブ・タイトルは *Kisah pendakian Puntjak Sukarno* (スカルノ峰の記録) とされている。これは、1963—64年におこなわれた日本・インドネシア合同探検隊による西イリアン中央高地の探検および、スカルノ峰(旧名・カールステンツ峰5030m)登頂に関するインドネシア側の公式報告書である。

この探検隊の日本側名称は、京都大学西イリアン学術探検隊予備踏査隊であり、加藤泰安隊長以下、京都大学を中心とする10名の隊員により構成され、日本側主催団体は、京都大学生物誌研究会である。インドネシア側では、*Ekspedisi Operasi Tjenderawasih* (ゴクラク鳥探検作戦) とよばれ、最高指揮者はスカルノ大統領であり、直接の担当機関は、本書の編集出版をした統合戦本部であった。

ついでながら、インドネシアではニューギニアを *Tjenderawasih* (ゴクラク鳥) の形にたとえており、ヘルフィンク湾は現在では、チャンドラワシ湾とよばれている。主要な地名の多くは、インドネシア流に改名されているので、インドネシアの西イリアン関係の文献を読む場合には注意が必要である。

本書のタイトル・*madju terus……Pantang mundur!* は「前進あるのみ……退却はゆるさず。」と訳される。これは、探検隊のうち登山班が悪天候にはばまれ、スカルノ峰登頂があやぶまれていたときに、大統領よりベース・キャンプにむけてうたれた無電の文よりとったものである。このことよりも、考えられるように、インドネシア政府の本探検隊への熱のいれようは大変なものであった。解放後、これといって明るいニュースがなかった西イリアンを国民に対してアピールする絶好の手段として、今回の探検隊が用いられたわけである。したがって、本書のところどころ、とくに登山班の記録のなかにはナショナリスティックな

性格があらわれる。インドネシア政府にとっては、今回の探検の第一の目標はスカルノ峰へ登頂することであり、学術調査は第二義的なものであったらしいが、これは独立まもない若い国としては無理からぬこととせねばなるまい。

さて、本探検隊のインドネシア側隊員は A. Hamid 隊長以下45名であり、登山班・無電班・護衛兵のほか、地形学者・地質学者・気象学者・文化人類学者・動物学者・植物学者・軍医・映画技師により構成されていた。日本・インドネシア双方とも、全隊員は登山班と科学班にわかれ、各々の班は別々に行動した。

本探検隊の主な目的とした探検ルートは、パニアイ湖畔のエナロタリより、ピオガ部落、スカルノ峰にいたる、ケマブー河、ローファエル河上流にそった地図上の直線距離にして、東西150kmにおよぶ標高1500m以上の山岳地帯である。このルートの一部は、1938年オランダの Le Roux を隊長とする地理学的探検隊と重複しているが、その他の地域は科学上の処女地をカバーしている。たとえば、本探検隊の接触した部族には、カポーク族・モニ族・西部ダニ族・ウフンドニ族があるが、このうち民族学的モノグラフがあるのは、パニアイ湖畔のカポーク族のみで、あとの諸部族についての調査は、ほとんどない。

本書の序文には、スカルノ・スバンドリオ・セニ陸相・ボナイ西イリアン総督が名をつらねている。前半の第一部は、登山班の行動記録およびスカルノ峰登頂記録よりなる。このうち、エナロタリよりピオガ部落にいたる日記体の行動記録は、信頼するにたる紀行や地図のないこの地域へ入ろうとするものにとっては、手引きとして使用し得る情報を含んでいる。

後半の第二部は、科学班の行動記録・地形地理学・気象学・地質学・植物学・動物学・植物生態学・住民の居住分布・住民の健康状態の各章よりなっている。各章は数ページより十数ページの短い論文よりなる予報的性格のものであるが、探検終了後、数カ月にして本書を出版したことには敬服せねばなるまい。

自然科学にうとい、わたしには正当な評価はできないが、本書のうち最も重要な部分の一つは、地質学の章であろう。バンドンの地質研究所からは所長以下、3名の地質学者が本探検隊に参加し、インドネシア側科学者のうち地質学者たちが最も精力的に調査をしていた。巻末にはルートにそった地質図がつけられてい